Ｆ１－４　もう我々はやり尽くしたのであろうか
- 本四３橋、エックスハイウェイ時代を迎えた四国の明日 -

高知県土木部　石川和秀

１　今後の四国（高知）の公共投資、社会基盤整備のあり方

2000年３月１１日、徳島自動車道の井川池田ＩＣ～川之江東ＪＣが接続され、四国４県都を直結する“エックスハイウェイ”が完成した。

このことは、四国の社会基盤整備（高規格自動車道）の整備手順の中で、大きな節目であることは確かである。

これまで四国（高知）は社会基盤整備の遅れ（客観的条件整備の低位さ）の原因を外部因子であるとし、その是正を外部の資金と力に求めてきたが、エックスハイウェイの完成により、曲がりなりにもその枠組から卒業しなければならない。

これからの条件整備は四国（高知）自らの意志と力で行わなければならない。

河川整備や道路の整備状況、進捗状況をこれまで“整備率”などとして、数値をもって示してきた。この表示方法は、客観性もあり、また、当該地域と全国平均あるいは他地域との比較を容易とし、なおかつ説得性も有していた。

しかし、今後とも、仮に率表示を用いるとしても分母の意味するもの、分子の機能するものが厳しく問われる時代ではなかろうか。

例えば、県道の整備目標が全体として2,000kmであったとする。この2,000kmを唯一の目標値としたのでは、県民への説明責任という視点からも意味がボケるのではないか。

整備の対象となる全体2,000kmのうち、通常の生活基盤としての条件整備として○○km、産業基盤として△△km、広域連携として□□km、更に、社会福祉として××kmなどと、全体の2,000kmを一本の座標軸で評価するのではなく、いくつかの座標軸で評価を求められる時代ではなかろうか。

また、分子についても、各座標軸毎に評価が求められているし、更に、生活座標軸の70点と産業座標軸の50点とを比較し、地域社会戦略としてどちらがどの程度、優位かを判定することすら求められよう。

更には、整備手順評価のなかにはもう一本の判定座標軸として“時間軸”を加えることが必要となろう。

また、残酷なことではあるが、各座標軸ごとに各地域の整備状況における均衡、バランスを保つことが求められる反面、客観的評価基準に基づく“格差の発現”も求められてくるかもしれない。

このような意識の変革のなかで、今後の公共投資を考える必要があると思われる。

更に付け加えれば、整備の目標として求めるものは“交流の拡大”とすることもできる。ひと、モノ、情報の交流拡大が必要とよく言われるが、それも一つの手段かもしれない。

“交流の拡大”という手段によって、真に求めようとするものは何か。県民・住民の視点で見極めなければなるまい。

２　四国は一つ論と公共投資について

エックスハイウェイの完成をひとつの契機として四県の知事ともども“四国は一つ”とした主旨の発言が目立つようになってきた。

確かに、４つの県都がエックスハイウェイにより、各々２時間～２時間30分で結ばれることは、時間距離を短縮しただけにとどまらず、心理的距離を縮めたことも事実だ。

四国四県の人口の合計は現在、417万人、全国12,650万人の3.3％であり、全国で10番目の“県”に過ぎない。

四国全体の面積は18,800km2、全国373,000km2の5%、さすがに現在２位の岩手県15,280km2を上回るが、とはいえ北海道の78,420km2の４分の１以下である。ちなみに全国で10,000km2を超える道県は７つもある。

四国は人口、面積においても、現状では一つの“県”として何ら不思議ではない。

しかし、四国の４つの県は、古事記以来、永い経緯と歴史を有している。そこには、風土、気候、食文化、人間性が加味されている。ここでは、単なる物理的な統合、合併などは何ら意味を有しないであろう。

ここで求められるのは“機能連携”ではないであろうか。弱い者同士、魅力のない者同士のいわゆる“弱者連合”は共倒れを呼ぶだけである。

互いが独立し、互いの実力、魅力を互いに認め合ったうえで、互いの強みを利活用しあえる連合体が理想型である。

それでは、高知県が徳島、香川、愛媛からみて何が魅力的か、何がセールスポイントか、何が対外的に有力な武器となりうるのか。それを自らが見いだし再認識し、それらを今後、どのように拡大、増幅していくのか。そのためには、どのような社会基盤整備がいつまでに必要なのか、見極める必要がある。
例えば、高知で言うならば森林を主体とした自然、環境 、太平洋、降雨、太陽などの視点が切り口となり得る。

また、四国３橋時代の到来で、四国は今や“島”ではなく、いわば“半島”となったと言われている。ならば半島としての魅力、活力を最大限に発揮するためには何が必要か。それは、半島の最深部に価値ある魅力を創造することである。そのことにより、半島全体の動脈が活気づき、活力が行きわたることとなろう。　さて、半島の最深部とはどこか。その魅力とは何か。それを最大限に引き出すためには何が必要か。そんな時代ではなかろうか。